

Title	現在志向の若者たち? : 見田宗介におけるコンサマトリー概念の三側面から
Sub Title	The present-oriented youth? : three aspects of the concept "consummatory" in works of Munesuke Mita
Author	徳宮, 俊貴(Tokumiya, Toshiki)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2024
Jtitle	メディア・コミュニケーション : 慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media and communications research : annals of the Institute for Journalism, Media & Communication Studies). No.74 (2024. 3) ,p.29- 36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : グローバリゼーションと持続可能なメディアのデザイン : 意識とモビリティーズ2
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20240300-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現在志向の若者たち？

——見田宗介におけるコンサマトリー概念の三側面から——

徳宮俊貴

序：問題の所在

序-1：若者の現在志向化。コンサマトリー概念の現場

本稿では、しばしば若者の現在志向化などの文脈でもちいられる「コンサマトリー (consummatory)」概念の射程を再検討するために、みずからの理論においてこれに重要な位置をあたえた見田宗介による用法を再解釈し、その多面的・重層的な含意を明らかにすることを試みる。

若者が現在志向になっている。未来の結果ではなく現在のたのしさを基準に行動するようになっている。社会学などの若者・青少年研究において「コンサマトリー化」と呼ばれる議論だ。コンサマトリーとは、『『今、ここ』の身近な幸せを大事にする感性』、『何らかの目的達成のために邁進するのではなく、仲間たちとのんびりと自分の生活を楽しむ生き方』(古市 2015: 135-6) とか、『『他人に負けないように頑張る』よりも『のんびりと自分の人生を楽しむ』ことを『望ましい生き方』とし』、『現在の生活に満足を見いだすこと』などと定義される(豊泉 2021: 109)。

将来に不安をかかえながらも若者たちは幸福を感じながら今を生きているとする古市憲寿の説によって近年(再)注目されている概念ではあるが¹、若者のコンサマトリー化自体は古くから指摘されてきた。豊泉周治の整理によれば、日本(の若者論)ではじめてこの概念をもちいたのは村上泰亮『産業社会の病理』(1975年)である。そこでは、高度経済成長期以後のあたらしい世代における、最善の結果を生むような手段に最終的関心をはらう手段的合理主義と、行動それ自体の価値のみを考え結果をまったく考慮しないコンサマトリーな価値との緊張関係が論じられた。また、千石保『「まじめ」の崩壊』(1991年)では、「まじめ」や「道徳」を喪失した困った若者たちの「病理」としてコンサマトリー化が指摘された。コンサマトリーな価値と手段的・道具的 (instrumental) な価値という対概念はタルコット・パーソンズ (T. Parsons) に由来する。「性格と社会の接点」(1961年)におけるデイヴィッド・リースマン (D. Riesman) 批判を参照した豊泉によれば²、「リースマンのいう内部指向型がパーソンズの道具的活動主義に照応することは明らかであろう。他人指向型の方は、さしあたりコンサマトリーな指向に対応すると見てよいであろう」。このように、「主として保守派の知識人によって取りあげられ、いっけん享楽的に見える若者の行動を批判的に論じる文脈でもちいられて」いたわけだが、「その後2010年代になると『幸福な若者たち』が注目されるようになり、『幸福』との関係がコンサマトリー概念の新たな中心問題として浮上したのである」(豊泉 2021: 60-9)。

そのなかで「見田宗介の場合は、おそらく唯一の例外であった」(豊泉 2021: 85)。instrumental/consummatory の対概念を「パーソンズ派の社会学の用語」(見田・加藤

2015=2019:263) から借用したことは見田自身が認めるところだ。しかし、「『手段主義』(道具主義)の誤りこそ、20世紀型革命の破綻の理由として、見田が初期の頃から一貫して追及し続けたこと」でもあった。見田は「パーソンズ社会学がなお強い影響力をもっていた頃、パーソンズの道具的活動主義とは正反対の立場に立っていたのである」(豊泉2021:86-9)。

現在志向で幸福な今日の若者像と見田のコンサマトリー概念との接点がここに認められるわけだ。が、“現状”との向きあい方において両者はじつに微妙に食いちがっているように思われてならない。

序-2: 見田宗介のコンサマトリー概念。現在志向的読解をこえて

人間と社会の可能性を理論的・比較社会的にさぐる見田の解放理論=社会構想では、近代資本制階級社会における交換価値(貨幣や時間)の物象化を脱構築し、のりこえるための想像力の獲得がめざされる。たとえば『時間の比較社会学』(1981年)では、「それぞれの物が、たとえそれ自体としてはどのようにかけがえのない固有の質をもつものであっても、それらをいわば外的に同型化する」普遍的な尺度として時間が物象化する結果、「夜明けの時と午後の時、恋愛の時と別れの時、私の時とあのひとの時、そのような時それぞれの固有性、絶対性は捨象され、たとえば夜明けの30分を『浪費する』ことをやめたり恋愛の2時間を『節約』したりすることの可能な対象へと還元される」(真木1981=2012:171,300)ようになることが批判的に論じられる。

「このような感覚のとり方を基礎づけている時間感覚は、最終結果のみに意味がある(「終わりよければすべてよし」!)ということ、すなわち〈未来が現在の意味である〉という感覚(instrumentalism)である」(真木1981=2012:6-7)。これに対置されるかたちで導出されるのがコンサマトリー概念だ。それはたしかに「現在を楽しむ」(見田2018:153)ことを指す。「コンサマトリーは邦訳不可能である」(見田1988:324)と断りつつ、「現時充足的」(真木1981)とか「即時充足的」(見田2009ほか)とか「現在内在的」(見田1979)などの訳語をあてていることから³、時間論的な側面をもつことはまちがいない。

もっとも、「解放のための実践はそれ自体が解放でなければならない」、つまり「未来にある『目的』のために、現在生きている人々のそれぞれに一回限りの生を手段化する」(見田2018:152-5)ことは決してあってはならないと主張するにあたって見田はコンサマトリーを提唱したわけで、現状に満足するなどという意味はもとより含まれていないはずだ(したがって、若者の現在志向化を示す経験的データでもって持論の正しさを実証しようとする態度はいささか短絡的だったといわざるをえない)。

さらに、見田がみずから執筆を担当した『社会学事典』(1988年)では、「性的なエクスタシー、芸術的な感動、宗教的な至福(bliss)のように、他の何ものの手段でもなく、それ自体として無償のよろこびであるような行為、関係、状態、時間、などである」(見田1988:324)と解説されている。時間論的な側面にとどまらない多面的・重層的な含意のひろがりを読みとかなければならないわけだ。以下では、『時間の比較社会学』のみならず見田の諸著作の関連箇所を相互参照することで、時間論的側面のほか、存在論的および主体論的と仮に名づけた側面を析出し(3つの側面の関係は最後に考察する)、コンサマトリー概念の再構成にとりくみたい。

1：コンサマトリー概念の三側面

1-1：現在の充足。時間論的側面

まずは時間論的側面を確認しておこう。『時間の比較社会学』において、コンサマトリーは「その時自体のうちに完結して充足する感覚」であると説明される。「そのはるかに粗野な先駆者のひとり」（真木 1981=2012：7, 261）として引かれるのが、孤独な散歩者としてビエンヌ湖畔にすわるジャン＝ジャック・ルソー（J.-J. Rousseau）だ⁴。

「ルソーの、これらの至福の状態についての描写は、たとえ〈現在〉がその周囲にどのような過去も未来ももつことがなくても、それ自体が充実することがありうるということを証言している」。「それは同時に、モンテーニュやフェヌロンやデイドロの現在主義とも異なる」。「それは、現在が空疎であるゆえに過去や未来を〈見出し〉て呼びもどしてくるることによってはじめて支えられ、充たされる現在でもなく、そのうらがえしに、過去や未来が失われたゆえに現在にたちかえって享樂する現在でもない。現在は、はじめに端的に充実している」。「過去や未来は（略）あってもなくてもよいという意味で、端的に関心外なのだ」（真木 1981=2012：253-4）。

1-2：個我の裂開。存在論的側面

ところが、同じ個所で見田はつぎのようにも述べる。「ルソーの〈至福の状態〉の、われわれの主題にとっての核心は、そこでは〈生の意味感覚〉が、まさしく時間ではないものによって支えられ充実しているということだ」（真木 1981=2012：254-5）。コンサマトリー概念は時間ではないものを（も）含意することがすでに示されている。『時間の比較社会学』をもうすこし読んでみよう。

「文化人類学、宗教学等の成果を渉猟し、原始共同体、ヘレニズム、ヘブライズム、近代社会の時間観念を大胆に比較してみせた」（落合 1993：53）本書によれば、構造や原系列や聖なる時間や、現代物理学において4次元空間として語られる「もうひとつの時空」とは、時間や歴史の流れをあらかじめ包摂する不動の母胎、すなわち「生の出来事をたえずみずからの無時間的で有限なわくぐみの中に還元してしまう基準体系である」。ミルチャ・エリアーデ（M. Eliade）が強調するとおり、「〈聖なる時間〉とは、まさにこのような時間の廃棄への意志に他ならず、それは〈時間のない時間〉であることをこそ本質とする」（真木 1981=2012：20-57）。

時間のない時間。無時間的な枠組み。見田のことばにいいかえれば、「存在の地の部分」のことだ。内田隆三や片上平次郎が指摘するとおり、人間は社会的現実の「世界（Tonal）」と存在そのものの〈世界（Nagual）〉の両次元を生きているという理解に見田は立っている（内田 2015；片上 2015）。〈世界〉とは、「水と草木と虫たちと人間たちとが、たがいに発生し交響し発散し分解し合う」（見田 1974=2013：17）ような「存在の地の部分」、すなわち「他者や自然や宇宙と直接に『まじり合う』わたしたち自身の根源である」（見田 1984=2012：196）。ルソーが『時間性』のたすけをかりることなしにその確実な〈生の意味感覚〉を獲得することができたのは（略）存在の地の部分のうちに、よろこびと自己の存在の根拠とを見出しえたからである」（真木 1981=2012：255）。

「われわれが、現時充足的な時の充実を生きているときをふりかえてみると、それは必ず、具体的な他者や自然との交響のなかで、絶対化された『自我』の牢獄が溶解しているときだということがわかる」。「現実との生命的接触」によって自我が「おのれの自閉をのりこえようとするまさにその瞬間」（真木 1981=2012：215-58, 317）、存在の地の部分に降り立つことは可能になる。これをコンサマトリー概念の存在論的側面として定位するな

ら、進化生物学者リチャード・ドーキンス (R. Dawkins) の利己的な遺伝子 (selfish gene) と延長された表現型 (extended phenotype) の理論によりながら、現代人間の五層構造 (生命性、人間性、文明性、近代性、現代性) のうち生命性 = 身体性の層位における個体の「自己裂開的な構造」として、その論拠を立証したのが『自我の起原』(1993年)である。

「生成子の『利己的な』戦略として考えてみても、他者に苦痛や死をもたらすという仕方です。その身体を操作することよりも、他者自身が喜びをもって、あるいは生存と繁殖の機会を増大させるような仕方です。協力を引き出す『戦略』がすぐれた『戦略』であるはずである」。「クローバーの芳香に引き寄せられるハナバチはその身体を『操作される』(略)。しかしハナバチはそのことによって自身もまた生存と生殖の機会を増大しているのであり、ハナバチに意識あるいは意識の原基形態が存在するなら、ハナバチは誘惑されてあることに喜びを感じ、あるいは喜びの原基形態を経験しているはずである」。「もちろんこの『利他性』は、遺伝子の『利己性』によって方向を決定され限定されている。それでもそれは、個体の身体がその存在の芯の部分に、その個体自体の利害を超えてしまう力を装置されているということを意味する」。「個体はその〈起原〉のゆえに、自己の欲望の核心部分に自己を裂開してしまう力を装置されている」。「われわれの経験することのできる生の歓喜は、性であれ、子供の『かわいさ』であれ、花の彩色、森の喧噪に包囲されてあることであれ、いつも他者から〈作用されてあること〉の喜びである。つまり何ほどかは主体でなくなり、何ほどかは自己でなくなることである」。「Ecstasy は (略) このように個の身体の外部にさまよい出るといふこと、脱・個体化されてあるといふことである」(真木 1993=2012 : 35, 132-47)。

1-3 : 効用の彼方。主体論的側面

花と昆虫に象徴されるこの「WIN-WIN の関係」(見田 2012 : 41) は、しかしながら、「個体としては利他／遺伝子としては利己」(真木 1993=2012 : 31) という点で「『何のために』という一次元的な目的－手段の論理の形式」(見田 1970 : 184) を脱しきれていないのではないか。見田自身も気づいていたようで、「走れメロス」(2016年)ではこれを「戦略的互惠関係」ないし「方法としての相乗性 (instrumental reciprocity)」と呼んでいる。そこへ「無償の友情」ないし「無償化された相乗性 (consummatory reciprocity)」が対置され、さらに無償が「無功德 (inutile)」(見田 2016a : 23-5) といいかえられる。無功德とは禅の教えで、御利益がないという意味だ。

じつは、こうした効用の論理の徹底的な否定——あるいは、のりこえ——こそ、見田の思索を通底するもうひとつのテーゼにほかならない。いわゆる全共闘運動への応答主体として真木悠介の筆名をもちいだした1960年代末の論考ですでに、「自由への要求は (略) 必要性や効用性からの解放それ自体、すなわち、非効用性それ自体、広義の『あそび』それ自体への要求としてあらわれる」(真木 1971 : 128) とされていたし、『宮沢賢治』(1984年)では、賢治における「焼身幻想、というはじめのモチーフは (略) 〈自己犠牲〉という納得のしやすい観念を形成することによって、ひとつの安定を」見いだしたが、「けれどもこのとき、〈自己〉を灼きつくすことという原初のモチーフはその到り得べき射程をかえて失って、効用性の社会道德の気圏の内部に繫留されたまま宙吊りにされてしまったのではないか」(見田 1984=2012 : 161) と洞察された。『現代社会の理論』(1996年)でも、ジャン・ボードリヤール (J. Baudrillard) 以後の消費社会論における「消費 (consommation)」概念にジョルジュ・バタイユ (G. Bataille) の〈消費 (consumation)〉が対置される。「バタイユが言う〈消費〉は、コンサマトリーな生き方とか感覚のことを言っている」(見田・加藤 2015=2019 : 264)。それは「生産主義的な合理性、有用性、功

利の原則に還元することのできないもの」,「人間の原的な奢侈性,無償性,効用なしに燃焼し消尽する存在としての力」,「どんな効用にも先立つような,〈生の充溢と歓喜の直接的な享受〉の位相として把握することができる」(見田 1996=2011:112-20)。

この無償性=脱効用性と前述の裂開の論理とをつなぐのが,ふたたび『自我の起原』における「エージェント的な主体性」(所与の目的遂行のための裁量権)と「テレオノミー的な主体性」(目的自体の自己決定権)の区別である⁵。「法皇と王たちという中世の二重権力がやがて権力一般の相対化に向かうダイナミズムを生むように,生成子と個という目的論の二重化がテレオノミーの相対化に向かうダイナミズムを生む」。「個体には,生成子たちの自己増殖の機構として形成されてきた起原に由来する衝動の力が今も強力に生きつづけている」。「個体がその個体という現在のかたちを愛し自己目的化して執着する力も強力に働きつづける。同時に個体はそうであるままでもた,同種や異種の他者たちの作用し誘惑する力の磁場にさらされている」。「このように〈個体〉のテレオノミーは非一義的であり,重層的に非決定である」。「〈個体〉は生成子の再生成の装置として決定されてはいないし,〈個体〉としての束の間の形態を自己目的化するように決定されてもいない」(真木 1993=2012:146-8)。こうして人間は「どんな目的にも仕えることのないものとして無償化し,それゆえにどんな目的をももつことのできるものとして主体化する」(見田 2016a:24)。これをコンサマトリー概念の主体論的側面と名づけておくことができる。

2: 尽きなく生きること

見田のコンサマトリー概念のひろがりをめぐる, (1) 現在の端的な充足, (2) 個我の裂開をとおした存在の地の部分への溶解, (3) 所与の効用性のかなたで無償の目的を定立する主体性という含意をひきだしてきた。「未来-現在」を「目的-手段」におきかえる手段主義に対する批判という当初の意図からすれば,第一の規定(現在の充足)と第三の規定(目的の定立)は相反するのではないか。解釈の難しいところだが,見田はつぎのように述べている。現在の充足を志向することは,「むしろ,未来のイメージを明確に構想しつつ,それにむかって現在の実践を合理的に自己統御するということと,いささかも矛盾するものではない」(真木 1971:26)。

人はなぜ獲物よりも狩りを好むか,とブレーズ・パスカル(B. Pascal)は問うた。「『目的』であるきつねや野うさぎが,たとえば彼らの目の前に10匹ぐらい手足をしばられて横たわっているならば,彼は最高に幸せだろうか?そこでは狩りのよろこびは何一つ存在しない」。「彼がほんとうに求めているのは,じつはその獲物ではなく,狩りの行動そのものであったのである」。「けれどもこれは,まだことがらの半面であるにすぎない。では反対に,彼のほんとうの『目的』が(略)結果ではなくて活動そのものにほかならないということをとらえて,でたらめに走りまわれば,彼は充実するであろうか?」(見田 1970:185)。こう反語風に問いかけ,手段主義とは異なる未来(目的)と現在(実践)の関係を語りだす。

「大きな目的の実現のためにたたかう人びとが,その実現を見ることなしにたおれてゆくことを少しもおそれないのは,その目的にむかう緊張の日々のさなかで,その生が現在において確固として充実しているからであり,今日という日の〈私〉の生が,けっしてみじめな『道具』などではないからである」(真木 1971:26)。「宮沢賢治の生涯は『挫折』であったとひとはいう」。「あるひとは賢治が革命の思想に到達しなかったから挫折だという」。「あるひとはまた賢治じしんが,11月3日の手帳に書きつけたことを生きられなかったところからその生涯を挫折だという」。「けれどもいったいどこに到達すれば挫折ではな

かったというのだろうか。「わたしたちがこの生の年月のうちになしうることとは、力尽さずして退くことを拒みぬくこと、力及ばずして倒れるところまで到りぬくことのほかには何があるか」。「このような破綻に至りぬくことをこそ、賢治はみずからの思想としてじぶんに課した」(見田 1984=2012: 232-49)。自己の限界を裂開して「尽きなく生きること」(見田 1973)、それこそがコンサマトリーだというのである⁶。

結：社会学的時間批判への示唆

最後に若者のコンサマトリー化論にたちもどって、本特集の趣旨である社会学的時間批判への示唆を検討しておこう。

大澤真幸が指摘するとおり、こんにち「人々は駆り立てられるように、常に急いでいる。人は、断片化された『現在』に圧倒的な力を投入し、活動する。どの『現在』に対しても、である。これは、コンサマトリーな時間の体験だろうか」。「違う！ そのまったく反対物である」。「後期近代の加速がもたらした時間構造は(略)インストゥルメンタルな時間の純化である」(大澤 2023: 143-4)。

これを論じるに際して大澤はハルトムート・ローザ(H. Rosa)の加速論を参照している。そのなかでも、「個々の行為の加速、休憩の除去、さまざまな活動の時間的多重化(マルチタスク)、時間のかかる活動を時間のかからない活動で代用すること」を指す「生活テンポの加速」という論点は示唆的だ。「内面生活を豊かにする体験エピソードをより少ない時間でより多く味わうことができるほどより良い生活である」という考えにしたがって「体験の濃縮化」を進め「即席の満足感」を得る。なるほど現在が充足しているように、つまりコンサマトリーであるようにも思われる。だが、「死が最終的なピリオドを打つ前に、主体に配分される現世の時間を可能な限り集中的かつ全面的に利用すること」を要請する点で、この「加速の文化的約束」は「プロテスタンティズムの倫理の時間の掟——浪費の禁止と効率化の要求」の「世俗的な機能的等価物」(Rosa 2005=2022: 155-74, 224-9)に相当する。

若者を取りまくことばを顧みてみれば、時短、スキマバイト、ライフハック、ガクチカ、スキルアップ、マインドフルネス、ビジネスなどなど、「タイパ」(タイムパフォーマンス=時間対効果)によって計られるような効用性に関心をおいていることがうかがわれる。そこに前提されているのは、「かせいだり、たくわえたり、節約したりすることの可能な『時間』」(真木 1981=2012: 300)、すなわち冒頭でみたような交換価値として物象化した時間以外の何物でもない。彼ら彼女らは、かつて見田が批判した「賢明な男⁷」たちや「『かわいい』世界のマリー・アントワネットたち⁸」や、「奇妙なピエロ⁹」へと自己成型する私たちに見えなくもない¹⁰。

とすれば、(未来の目的から切りはなされた現在をのんびり享樂するという若者像そのものの妥当性を措くにせよ)“スマートでオシャレなコスパ最強の生活”を送る現状に幸福を感じるどころか、そういった効用性への圧迫に対する抵抗の拠点としてさえ見田のコンサマトリー概念は読みなおせるかもしれないのである。もっとも、『あしたのジョー』のごとく「真っ白な灰に燃え尽きる自由」(橋本 2007: 95)という全共闘世代が求めたような生き方に通ずるおそれもなくはない。「『夢の時代』の社会学者」(徳宮 2022)たる見田宗介から拭いきれない「70年代の残響」(上野 2015: 38)をどう処理するかは慎重に判断しなければならないだろう。

● 注

1. 古市の議論の検討については、浅野（2016）、南（2018）、長谷川（2023）。
2. 一般に、パーソンズのコンサマトリー概念を参照する際に引かれるのは“General Theory in Sociology”（1958年）ならびに *The American University*（1973年）であり、そこでは instrumental/consummatory という変数は時間に関するものとされる。なおパーソンズ研究においても、consummatory は「（自己）完結的」とか「目的的」とか「（自己）成就的」とか「充足的」などの邦訳が試みられているものの定訳が存在しない。高城和義によれば、パーソンズ自身は心理学用語の「完了行為（consummatory action）」から採用したようである（高城 1986）。
3. 「しいて訳すと即時充足的といえますね、そのとき充足されるという意味。しかしそれもちょっとまずいんですよ。それは利那主義とか娯楽主義とはまたちがうわけですね。今が喜びであるということはそういうことじゃなくて、もっと奥深いものであるし、持続的ですね。そしてそれはものすごく身体的なものでもありうるし、精神的なものでもありうるし、高度に観念的なものでもありうるし、と思うんですね」（見田 1978：48）。ちなみに『現代社会の存立構造』では「直接＝享受的」と訳されている（真木 1977a）。
4. 「魂が十分に堅固な地盤を見いだして、完全にそこに安住し、そこに自分の全存在を集めて、過去を呼び起こす必要もなく、未来に一足飛びする必要もないような状態、時間が魂にとってなんの意味もなく、いつまでも現在が続き、しかもその持続を示さず、継起のあともなく、不足や享受の、快楽や苦痛の、欲望や恐れ的情感もなく、ただわれわれの存在という感情だけがあって、その感情だけが魂の全体をみとることができる、そういった状態があるとすれば、その状態が続くかぎり、そこにある人は幸福な人といえる」（『孤独な散歩者の夢想』）（真木 1981=2012：252-3）。
5. 「たとえば軍隊の前線司令官はいちいち統合幕僚本部の指示を仰ぐことなく、臨機応変に判断し対処する能力を求められる。つまりエージェント的な主体性を高度にもつことを要求される。しかしそれはすべて、その『戦争目的』に資する限りであって、この『戦争目的』自体を批判したり変更することは許されない。つまりテレオノミー的な主体性は禁止されている」（真木 1993=2012：81）。
6. 『氣流の鳴る音』（1977年）では、カルロス・カスタンエダ（C. Castaneda）の師ドンファン「心のある道」ということばにコンサトリー概念のイメージが託される。「『心のある道』には長さはあっても『端』は問題でないのだ。『道のりのすべてを歩みつくること』イコール『端までたどりつくこと』という『意識の自明性』に足をすくわれてしまうほどまでに、われわれの『世界』のまづしは深い」（真木 1977b=2012：137）。この発想は、はじめて真木悠介名義で発表された論考「解放の主体的根拠について」（1969年）における見田自身の宣言と正確に呼応しているとも見ることが出来る。「自己の行為と生活を内的な無根拠のままに放置し、その時どきの外的な諸根拠にゆだねることを拒否し、真にみずからの生としてその生を生きることを欲するすべての人びとと共に、私はこの〈答えのない問い〉に向って、私におそらく長い道程を歩みつきたい」（真木 1969=2023：114-5）。
7. 「やっても無駄なことはやらない」。「彼はいつでもスマートで破綻を知らず、恥をさらすということをしない。『賢明な男』が死んだとき、彼の日記には日付がついているだけで、何も書いてない。彼の人生には何ごともなかったのだから」（真木 1971：45-6）。
8. 「一つの社会はその生産の始点においても消費の末端においても（略）『キタナイ』仕事や『ダサイ』仕事を前提とし必要とするほかはないのだけれども、『オシャレ』で『キレイ』な虚構の空間の住人たち（略）はそれらを見ることを自ら禁止し、相互に禁止する。ダサイことは語るな。思考するな。『かわいい』世界のマリー・アントワネットたちの、あっけらかんとした、残酷」（見田 1990=2011：119）。
9. 「人はみずからの表相性をすすんで演技することをとおして、他者たちの視線を逆に操作しようと試みる」。「ところがこの〈演技〉こそはまさしく（略）主体性の企図をとおして、いつしかみずからを、都市の要求する様々な衣裳をゴテゴテと身にまとった、奇妙なピエロとして成形する。N・Nの話ではない。われわれのことだ」（見田 1971=2011：47）。
10. ただし、一過性の流行に長期的な変化の微弱な胎動を聴き取ろうとする見田の基本姿勢も考慮せねばならない。「テクノの街の先端を歩く青年たちの『アフリカ幻想』のようなもののうしろには——本当にアフリカに行ったら、ハエが怖くて逃げて帰ってしまうようなヤワな連中なんだけど——何かあるのだと思うんですね」。「はるかなはるかな遠い所にある、自分自身の存在の底の底の方にある、うち開かれた世界に向かって、必死に手さぐりの手を伸ばしている、そういう触手の一本であるような気がする」（真木 2001=2023：98）。「シニカルになることの方が恐ろしいと思います。どうせ取り込まれるだけじゃないとか、どうせそれでまた儲けるやつがいるじゃないかとね、そういう言い方でせっかく出てきた新しいものを、シニカルに揶揄したり、批判することの方が僕は良くないと思っています」（見田 2016b：4）。「いわゆるダウンシフターズに見田の示す共感」（浅野 2023：34）からすれば、「永く着られ、汚れが目立たず、値段と着心地の両方を追求した『定番服』（小川〔西秋〕2010：35）といったトレンドもまた肯定しただろう。

● 引用文献

- 浅野智彦、2016、「青少年研究会の調査と若者論の今日の課題」藤村正之・浅野智彦・羽瀧一代編『現代若者の幸福：不安感社会を生きる』恒星社厚生閣、1-23。
- 浅野智彦、2023、「見田宗介／真木悠介の社会学を若者論として読み直す」『思想』1192：24-34。
- 古市憲寿、2015、『絶望の国の幸福な若者たち』講談社。

- 長谷川裕, 2023, 「今日の日本の若者のコンサマトリー意識：高校生意識調査データの分析を通じて」『人間科学』43: 103-136.
- 橋本 努, 2007, 『自由に生きるとはどういうことか：戦後日本社会論』筑摩書房.
- 片上平二郎, 2015, 「転回点としての『宮沢賢治』：1980年代の見田宗介」『現代社会学理論研究』9: 105-116.
- 真木悠介, 1969, 「解放の主体的根拠について：根底的解放の理論のために」『うつくしい道をしづかに歩く：真木悠介小品集』2023, 河出書房新社, 109-137.
- 真木悠介, 1971, 『人間解放の理論のために』筑摩書房.
- 真木悠介, 1977a, 『現代社会の存立構造』筑摩書房.
- 真木悠介, 1977b, 『定本真木悠介著作集Ⅰ 気流の鳴る音』2012, 岩波書店.
- 真木悠介, 1981, 『定本真木悠介著作集Ⅱ 時間の比較社会学』2012, 岩波書店.
- 真木悠介, 1993, 『定本真木悠介著作集Ⅲ 自我の起原』2012, 岩波書店.
- 真木悠介, 2001, 「生命の火種」『うつくしい道をしづかに歩く：真木悠介小品集』2023, 河出書房新社, 88-101.
- 南 学, 2018, 「現代の若者の価値観と友人関係」『三重大教育学部研究紀要』69: 221-227.
- 見田宗介, 1970, 『現代の生きがい：変わる日本人の人生観』日本経済新聞社.
- 見田宗介, 1971, 「まなごしの地獄：尽きなく生きることの社会学」『定本見田宗介著作集Ⅵ 生と死と愛と孤独の社会学』2011, 岩波書店, 1-66.
- 見田宗介, 1974, 「時間のない大陸」真木悠介『定本真木悠介著作集Ⅳ 南端まで：旅のノートから』2013, 岩波書店, 12-17.
- 見田宗介, 1978, 「人間の全体性回復の理論」『農村文化運動』69: 42-48.
- 見田宗介, 1979, 『現代社会の社会意識』弘文堂.
- 見田宗介, 1984, 『定本見田宗介著作集Ⅴ 宮沢賢治：存在の祭りの中へ』2012, 岩波書店.
- 見田宗介, 1988, 「コンサマトリー／インストゥルメンタル」見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂, 324.
- 見田宗介, 1990, 「夢の時代と虚構の時代」『定本見田宗介著作集Ⅶ 生と死と愛と孤独の社会学』2011, 岩波書店, 98-121.
- 見田宗介, 1996, 『定本見田宗介著作集Ⅰ 現代社会の理論（増補版）』2011, 岩波書店.
- 見田宗介, 2009, 「人間と社会の未来」『現代と親鸞』親鸞仏教センター, 17: 180-214.
- 見田宗介, 2012, 『現代社会はどこに向かうか：生きるリアリティの崩壊と再生』弦書房.
- 見田宗介, 2016a, 「走れメロス：思考の方法論について」『現代思想』44(17): 16-26.
- 見田宗介, 2016b, 「現代社会とファッションの未来」『服飾研究』4: 2-7.
- 見田宗介, 2018, 『現代社会はどこに向かうか：高原の見晴らしを切り開くこと』岩波書店.
- 見田宗介・加藤典洋, 2015, 「加藤典洋：現代社会論／比較社会学を再照射する」見田宗介『超高層のバベル：見田宗介対話集』2019, 講談社, 247-289.
- 落合恵美子, 1993, 「時間・解釈・歴史社会学」『ソシオロジ』37(3): 53-57.
- 小川（西秋）葉子, 2010, 「（時間－空間と生命環境）サステナビリティとノンリニアリティ：グローバルな秩序形成における集合的生命の時間」小川（西秋）葉子・川崎賢一・佐野麻由子編『〈グローバル化〉の社会学：循環するメディアと生命』恒星社厚生閣, 25-54.
- 大澤真幸, 2023, 「資本主義とエコロジー」『未来のための終末論』左右社, 94-173.
- Rosa, Hartmut, 2005, *Beschleunigung: Die Veränderung der Zeitstrukturen in der Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (出口剛司監訳, 2022, 『加速する社会：近代における時間構造の変容』福村出版.)
- 高城和義, 1986, 『パーソンズの理論体系』日本評論社.
- 徳宮俊貴, 2022, 「見田宗介における社会構想の社会学：人間の可能性の理論」神戸大学大学院人文学研究科2022年度博士論文.
- 豊泉周治, 2021, 『幸福のための社会学：日本とデンマークの間』はるか書房.
- 内田隆三, 2015, 「宮沢賢治のりんご：見田宗介の試みを受けて」『現代思想』43(19): 76-96.
- 上野千鶴子, 2015, 「孤峰としての見田社会学」『現代思想』43(19): 38-39.

● 附記

本報告はJSPS 科研費 JP22K01917 の助成を受けた研究成果の一部です。

徳宮俊貴（神戸大学大学院人文学研究科学術研究員）